

岸佑樹先生の「できた喜びを実感できる算数の授業を目指して」について

名古屋学院大学 宇野民幸

岸先生は、本実践研究の副題として、「考えを見える化できる練習問題を設定し、それを振り返る活動の工夫を通して」という手立てについて述べられている。それは、具体的には「手立てⅠ」においては、式と答えだけではなく、児童がどのように考えたのか「わけ」を書くことであり、また「手立てⅡ」において、児童が考えを振り返ることができる「ノートづくり」を、「算数日記」として、様々な視点からおこなうという方策である。その特徴としては、ともに児童の誰しものにとって、やるべきことがわかりやすく、また、まず、児童本人にとっての「見える化」をうながして、ゆえに、各自が納得しながらおこなうことができ、実質的な学習効果にもつながっている。

この3年生のクラスでは、事前からすでに、「算数を好き」あるいは「どちらかと言えば好き」という児童が9割を占めていたということであるが、先生は、「好き」といっても、計算をすることは好きであるが、「わけを考える」ことであったり、「難しい問題を考えること」など、数学的な考え方につながる興味・意欲が、児童らに必ずしもあるとはいえないことに問題意識を持たれており、上記のような具体的な手立てを講じ、「自分で考え、友達の考えも理解し、自分なりに問題を解決できたという喜びを」味わってもらうことを目的として、主眼を置かれている。この、「自分なりに」という力点は、手立てに具現化されており、考えた「わけ」を自由に書かせる設定や、振り返りの算数日記を4つの視点に分けられ、その児童の振り返りを、また、傾向の考察やあらたな課題の設定に活かされている。

実践の単元内容は、「あまりのあるわり算」であり、直接先生ともお話する中で、実践現場における課題からも抱いていた、この単元とその周辺についての考察を、この機に別稿でまとめた。

岸先生が、自ら実践の課題として挙げられた「1つの問いに対してアプローチの方法を書かせたため、多くの問題に取り組むことができなかった」点については、そのような丁寧な、また毎日にわたる各児童への見える化の手立てが、意欲的な姿勢と学習効果につながった利点は大きいといえるが、具体的な手立てにおいては、毎時限ごとに設定された「見える化」と「振り返り活動」には、徐々に僅かでも変化を与えていく方策が考えられる。例えば、ひとの意見を参考にする度合、ヒントを与える度合、視点を分けて与える度合など、学習計画に即して順序を考慮した、段階的な介入と構成の工夫を組み入れると、全体の時間調整に余裕を生む可能性を見出せる。

そして、「一部の児童は…など必要のない振り返りとなってしまった」という課題点に関しては、先生ご自身が指摘されているよう、「見える化」や「振り返り」においては、学力が高い児童でも、例えば図式などによる表現は、充実してこない場合がある。児童が自分の考えを説明することにも活かしているこの「見える化」を、今度はひとにも「見える化」するよう、例えば、ひとが見ただけで（説明をつけなくとも）わかる見える化、わからなかった人にもわかる見える化に展開して、それを取り上げていくことで、その課題解決とさらなる実感に既に近づいている実践である。